



ゆめ半島
千葉国体
2010

国体の記憶 15

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課（☎20・1503）へ。

3秒で喫した一本負け

高校から始め、選手そして指導者として30年以上柔道人生を歩んできた。中でも一度だけ出場した国体は「いろいろな意味で思い出深かった」と振り返る。

やす た ろ う
土屋 安太郎さん(富里市)
いすみ市(旧大原町)生まれ。
昭和29年、県立大多喜高校在学中に柔道で北海道国体に出場。スポーツ特待生第1号として入学した東洋大学では、主将としてチームを引っ張った。昭和38年から平成元年まで成田高校柔道部監督を務める

高校3年の夏、舞台は北海道苫小牧。特別に運行された国体列車に2日間揺られ、ようやく着いた北の地は、広大な自然と清涼感にあふれていた。旅行経験もろくなかった少年の目には「異国の地」と映った。

「驚いたのはそれだけではありません。泊まり先に連れて行かれると、そこは旅館ではなく「公娼宿」(売春が許容されていた飲食店)だったんです。もちろん健全に一晚を過ごしましたが」。いくら国民的スポーツの祭典といっても、そこはお金のない時代。都道府県が使える予算も限られ、今のようにはユニフォームや試合着もなく、宿泊所も粗末なものが一般的だったのだという。

試合はよもやの初戦敗退に終わった。同年に安房高校が全国を制し、名を轟かせていた千葉県勢は、当然優勝候補の筆頭に挙げられていた。だが、自



国体列車で(右が土屋さん。左は現県柔道連盟会長の三橋秋義さん・昭和29年)

身が任された先鋒戦で、得意の内股を仕掛ける間もなく一本負けを喫すると、続く中堅・大将もあっさりと星を落としてしまった。「組んでたつたの3秒でしたよ。3人とも負けてしまったときは何が起きたのか分からなかった」。監督やほかの選手からこっぴどく叱られ、「このままじゃ地元に戻れない」と落ち込んでいたが、結果的には敗戦相手の香川県が優勝。気を取り直した監督に洞爺湖温泉へ連れて行ってもらい、悔しさも疲れも全部吹き飛んだ。

来年には37年ぶりに千葉県で国体が開催される。柔道は成田市での実施種目だ。「今から楽しみです。日本の柔道は世界から見直されてきています。選手たちには、勝負にこだわり過ぎず一本を狙いにいくダイナミックな柔道を見せてほしいと思います」

編集後記

“広報なりた”15日号の最終紙面を飾る“国体の記憶”も回を重ねて15回目となりました。今回は私の母校、成田高校の元教諭土屋先生。久しぶりにお会いし髪に白いものが目立ちましたが、その温和な人柄は当時とほとんど変わらず、「アンタロー先生」健在。楽しかった日本史の授業が思い出されました。たくさんのお話をお伺いし、紙面には載せられないようなことも…。柔道部に若い先生が入ると、すぐに監督の座を譲り後輩の育成に尽力。私もこんな風に歳を重ねられたら素敵だなあと感じました。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。

平成21年12月15日号 No.1161

成田市のホームページ <http://www.city.narita.chiba.jp>